

小品系般若經〈常啼菩薩品〉の教説構造

勝 崎 裕 彦

小品系統から大品系統へと展開する、いわゆる大部般若經典について見ると、その最終章品として有名な「常啼菩薩の物語」が説かれ、第二流通分としての囑累品に結ばれて、『般若經』の教説が完結する仕組みとなっている。この「常啼菩薩の物語」を説く章品を大きく括って〈常啼菩薩品〉として、大部般若經典の最終章品という枠組みを科判で明確に示されたのが、梶芳光運博士の研究の一つでもある。ここでは、その大部般若經典を一貫する〈常啼菩薩品〉の教説について、とくに表題において小品系般若經と限定したのは、原

初的な小品系統の『般若經』の經文理解という立場から考察を進めるといふ意図である。

現存各種テキストの章品名に見る〈常啼菩薩品〉の基本的な構成は、常啼菩薩品と法上菩薩品の二章品を本説として、これに付け加えて囑累品の一品を含ましめた形態である。た

とえば小品系統の諸訳諸本の中でも、また本稿でも經文の基準として取り上げる鳩摩羅什訳『小品般若經』でいえば、薩陀波備品第二十七と曇無竭菩薩品第二十八の二章品及び囑累品第二十九の三章品が相当する。

〈常啼菩薩品〉は、小品系統の經文の中では少しく後代になつて増広付加された教説であるともいわれているが、最古訳の支婁迦讖訳『道行般若經』においても、すでに薩陀波備菩薩品第二十八と曇無竭菩薩品第二十九及び囑累品第三十として収録されて、決して等閑視できない内容である。というのも、經文は二つの囑累品を持っていて、〈常啼菩薩品〉は小品系統の最初の結びである第一囑累品の終わった後に教説の増広拡大の形式で説かれている。たしかに小品系統の教説の展開過程から見れば、二次的な追加經文といえなくもないが、思想内容的にもきわめて重要な章品である。つまり〈常啼菩薩品〉の趣旨は、『般若經』の菩薩の実例物語として、知られるように常啼菩薩の求法譚・求道譚としての位置付け

である。これはたとえば『法華經』の章品構成と比較しても、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』囑累品第二十二の後にいわゆる菩薩行道篇が並べられて、有名な諸菩薩の実例物語となっている構図と同様である。

ところで実際の教説内容を見ると、『道行般若經』と、これを継承して改訳した支謙訳『大明度經』の古訳二本の經文が、ほかの諸本と対比して趣きを少しく異にしている。とくに、『道行般若經』薩陀波倫菩薩品第二十八及び『大明度經』普慈闍士品第二十八の冒頭にそれぞれ記される「常啼菩薩の求法因縁譚」の一段や、囑累品第三十及び囑累阿難品第三十の流通分の教説は、古訳兩本に特異・特有のもので、〈常啼菩薩品〉の成り立ちに示唆を与える。しかし、〈常啼菩薩品〉全体の骨子骨格や展開過程は、小品系統から大品系統へと展開する諸訳諸本を通してほとんど変わらず、古訳以来の原型は崩れていないと見るべきであらう。

二

さて〈常啼菩薩品〉の主題の核心は、一つには、般若波羅蜜を求める新発意菩薩の常啼菩薩（鳩摩羅什訳では薩陀波輪菩薩）と、般若波羅蜜を教え説く不退転菩薩の法上菩薩（曇無竭菩薩）という二菩薩を主人公として登場させ、新発意と不退転の二様の菩薩を対比・対照して教説する構成である。し

小品系般若經〈常啼菩薩品〉の教説構造（勝 崎）

かもこの図式は、小品系統の冒頭の第一章品〈須菩提品〉で説き明かされた菩薩の基本的な理念の投影であり、教説の基調である。いわゆる新発意菩薩の求法譚・求道譚を通して、般若波羅蜜の法門に入るべき道筋が提示されるわけである。

また二つには、『般若經』の転法輪の具体的様相を表す般若波羅蜜の教えの伝承譚としての役割である。説法者である法上菩薩は、衆香城（Gandhavati）の法座で一日に三回の般若波羅蜜の説法をすると説かれる。大勢の聴聞者に向かって教えを説く法上菩薩は、まさに般若波羅蜜の法師・説法師（dharmaṅkara）である。すなわち、

於是大會百千萬衆諸天世人。一處集會。中有聽者中有受者中有持者。中有誦者中有書者。中有正觀者中有如說行者。是諸衆生已度惡道。皆不退轉於阿耨多羅三藐三菩提（大正八・五八一b）

とある經文のように、ここでは①聴者②受者③持者④誦者⑤書者⑥正觀者⑦如說行者という役割名称によって、般若波羅蜜の教えの伝持・書写・修行の實際のあり方が示されている。

さらに、

其寶臺中有七寶大床。床上有四寶函。以真金鏤書般若波羅蜜。置是函中。其臺四邊垂諸寶幡（大正八・五八三b）

という注目すべき一節を提示する必要がある。宝台とは、宝塔・樓閣ともいい、仏塔にも比せられる。その宝台の中の

七宝の大床の上に、四宝の函の中に納められているのが、黄金の板に書写された『般若波羅蜜経』である。『般若経』では、宝台・楼閣の中に般若波羅蜜の輝かしい教法・経巻が置かれ、やがて現出するのである。ただ経文中に帝釈天（釈提桓因・Sakra-devānām Indra）が常啼菩薩に向けて、「善男子。

在此七寶篋中黄金鑲上。曇無竭菩薩七處印之。我不得示汝」（大正八・五八三c）と語っているように、もとより七つの印章に封印された『般若波羅蜜経』は、勝手に見せられるものではないというわけである。いずれにしても、法上菩薩に託されているこの黄金の板に書写された『般若波羅蜜経』は、経巻供養を第一義とする『般若経』の主題を提示しているものである。

三

〈常啼菩薩品〉の主人公は、もとより常啼菩薩と法上菩薩の両菩薩である。これに、空中の声あるいは夢中の声として登場する如来・天人や、帝釈天、悪魔、長者の娘やその父母などがからんで、感動的・象徴的な物語が展開する。それぞれの登場者にはそれぞれの役割分担があり、物語の劇的構成を担い、叙述展開や場面転換にきわめて重要な活躍をする。一々の登場者の性格と役割には、それぞれ象徴的にして、譬喩的な意味合いが込められているが、今は主役の常啼菩薩と

法上菩薩の性格・立場・姿勢について論述して、そのほかの脇役の登場者については閑説するだけにとどめる。

常啼菩薩は梵名が Sadāpariṇīta だ、つねに嘆き悲しむもの、いつも泣き悲しむものの意味で、この初発心の菩薩の要所要所での悲泣と感涙が物語の特色ともなっている。『小品般若経』薩陀波崙品第二十七の冒頭は、

佛告須菩提。若菩薩欲求般若波羅蜜。當如薩陀波崙菩薩今在雷音
威王佛所行菩薩道（大正八・五八〇a）

という出だしではじまる。そして常啼菩薩は、空林中つまり空閑林（阿蘭若処、araṇya-gata）からの空中の声に導かれて、般若波羅蜜の求法・求道の旅に出発する。「東行五百由旬」、古訳には「東行二萬里」という衆香城への旅程である。その際、菩薩は、「善男子よ」と呼び掛けられながら巧みに導かれるが、その基本的な姿勢は、「不依世事。不捨身命。不貪利養」（大正八・五八〇a）という心掛けに徹するものである。後に物語られる捨身行（捨身聞法・捨身供養）に挺身しようとする姿が暗示されるわけである。そしてなんといっても〈常啼菩薩品〉の最高潮の場面は、聞法のために、供養のために、自分の身体を売って財力を求めようとして、衆香城の町中で、「誰欲須人誰欲須人」（大正八・五八二a）と声をふりしぼって呼び掛け歩く一段である。つまり試練の申し出に對して、常啼菩薩は感涙にふるえて、即座に刃物を取り、心臓

と血液と骨髓を売ろうとする。すなわち、「即執利刀刺右臂出血。復割右髀欲破骨出髓」(大正八・五八一b)と記されるごとくである。

この常啼菩薩の求法・求道の道程に、悪知識としての悪魔の誘惑、というよりも妨害に等しきこと、バラモンの姿(『八千頌般若経』は、少年の姿)に身を変えて現れる帝釈天の試練、長者の娘のやさしい助けが加わって、法上菩薩からの聞法となる。もとより法上菩薩は、般若波羅蜜の教えに熟達した不退転菩薩である。「與六萬八千姝女。五欲具足共相娛樂」(大正八・五八一a)と、うありようで、富裕な在俗の生活を樂しむものとしての設定で、まさに在家の菩薩である。法上菩薩こそは般若波羅蜜の説法師として、常啼菩薩の善知識(Kalyāṇa-mitra)である。もともと常啼菩薩も、いずれ長者の娘たちの善知識となる仕組みになっている。

ところで法上菩薩のありようは、その大いなる説法とはかりしれない三昧の修法によって示される。つまり、『般若経』の法輪を転ずる説法師であり、その梵名の Dharmadagata に由来することく、仏法を生み出すもの、涌き起こすものとして、仏法をおのずから説き示すことのできる不退転の菩薩である。加えて法上菩薩は、はかりしれない三昧に入り、いざ般若波羅蜜の甚深の真義を説き示す前に、さらに七日間三昧を続けている。あたかも、釈尊仏陀が成道後なお菩提樹下で

三昧に入り、七日の後に三昧から立ち上がったという、かの仏伝の故事を踏襲している。

三昧の実修は、第一章品〈須菩提品〉以来の小品系般若経の要件で、最終章品の〈常啼菩薩品〉に継承しているのである。すなわち常啼菩薩もまた重要な場面で、二度に及んで数えきれないほどの諸三昧を体験する。最初は、般若波羅蜜を教え説くという法上菩薩の存在を知った時、二度目は法上菩薩をまのあたりにして教えを聴聞した時、般若波羅蜜を見きわめて執らわれを離れるための深い精神集中、やすらかな瞑想を実修するのである。

四

〈常啼菩薩品〉の主題や説法構造及び思想内容を考察しようとする時、ほかの經典との関連も注意する必要がある。とくに具体的には、本生経類の中で、康僧会訳『六度集経』

卷七、禪度無極章第五に第八十一常悲菩薩本生と呼ばれる本生譚がある。内容ははるかに素朴な記述であるが、大乘仏教的色彩を反映した本生譚として、常悲菩薩の訳名であるが「常啼菩薩の物語」が説かれており、仏伝文学と大乘經典とのかかわりからも比較検証すべきであろう。また『法華経』の教説との比較において、『妙法蓮華経』でいえば、囑累品第二十二に続く薬王菩薩本事品第二十三以下の菩薩行道篇も

大いに参照とすべきであるが、今はくわしく触れることはできない。

いずれにしても『般若経』の〈常啼菩薩品〉は、物語の主題・構成が確実に定まり、しっかりとした骨格の中で、物語展開の手際よさ、巧みさが発揮されている。もとより、小品系般若経の製作過程においても、諸訳諸本の経文に見られる教説の書き足しや概念の挿入・編入などによる増広拡大や異同・変容の具合においても、主題の変調や劇的構成の変化には至っていない。〈常啼菩薩品〉は、『般若経』の菩薩の具体的な実例物語として、ある意味では、小品系般若経の基本的な理念や提題がすべて盛り込まれているわけである。理念や提題というのは、小品系統の『般若経』の出現の意図や菩薩思想の基本理念及び実践課題ということで、原型般若経典以来の問題意識をふくらませているのである。もつといえ、小品系般若経としての成立事情を伝え、『般若経』の起源を予測させる手掛かりをも胚胎しているのである。さらにいえば、『般若経』を中心とした初期大乘仏教の原態を伝えるものである。

- 1 梶芳光運『大乘仏教の成立史的研究』「別出般若経科判」、七二九—一〇一八ページ参照。
- 2 なお、内容の対応が指摘される『六度集経』の常悲菩薩本生の一節を要記した宝唱等集『経律異相』巻八の自行菩薩部には、

「常悲東行求法遇佛示道（第六）六」（大正五三・四一a）という節題が付されて、求法譚・遇仏譚・示道譚として解している。3 それでも経文の分量としては右記の常悲菩薩本生と比べて、「その相当部分だけで、『道行般若』ですでにその約二倍、『小品般若』では三倍近くに、『仏母般若』では四倍近くになっている」という記述がある（藤田正浩「仏伝文学と大乘経典——『六度集経』の『常悲菩薩物語』と『般若経』の『常啼菩薩品』」、『印仏研』三九巻一、二八—二九ページ）。

4 基本的な要約は、「小品系般若経（常啼菩薩品）の主題」（『宗教学研究』三〇三号、二四七—二四八ページ）というレビューに少しく報告した。

5 『小品般若経』欺淨品第九には、「須菩提提諸天子。非初轉非二轉。何以故。般若波羅蜜法中無轉無還。佛告須菩提。摩訶波羅蜜是菩薩般若波羅蜜。所謂於一切法無轉無著。得阿耨多羅三藐三菩提。亦無所得。轉法輪時亦無所轉。無法可還無法可示無法可見。是法不可得故」（大正八・五五三a）とあり、最初とか第二とかいう転法輪の区別や執られはれないとしているが、『般若経』の第二転法輪を意識している。

6 『経律異相』巻八の自行菩薩部の第一項に、「薩陀波耨爲（欲聞法賣心血髓（第一）一）とあり、鳩摩羅什訳『大品般若経』巻二十七の経文を要略している（大正五三・三九一a—c）。

7 なお小品系統では陀羅尼は説かれるない。一切三昧門」「一切陀羅尼門」と並称されて盛んに説かれるのは、大品系般若経に移行してからである。

8 口頭発表においては、色身説・法身説に関する〈常啼菩薩品〉の教説を提示して、仏身観をめぐる小考を加えたが、今は紙幅も尽きたので別の機会に整理したい。

〈キーワード〉 般若経、菩薩思想、常啼菩薩

（大正大学講師）